

史実に見る『平家物語』の人物の死生観

——平知盛にみる死の過程と死生観——

Seen in Historical Fact, "Heikemonogatari": a View of the Life and Death of the Person

— The Process of Life and Death and the Sense of Death as Seen by Tomomori Taira —

村上 詠子

(Eiko MURAKAMI)

I. はじめに

「合戦の庭に出て、死は案の内の事、生は存の他のこと也」(『保元物語』上(金刀比羅本))「官軍勢汰へ並びに主上三条殿に行幸の事」、これは、源義朝が生ある時に昇殿を強く望んだ時の言葉だ。「生ある時に」の思いとは、自己の倫理が自己の意思によって本位とは異なる意志の中で死を受け入れざる得ない衝動が、名誉への執着を駆り立て、名誉を守ることが自己の存在の証しだった。武士の世に生じた人々は、死への得心を一体、何時、どんな機会を得て包み込んでいったのか。

浄土への旅立ちのその有様は様々である。『平家物語』に描かれた生業は独自の自己表現を持ち、武士という意識の中で家の名誉と伝統は守り継がれてきた。平清盛が望んだ「武士の世」は、二〇年という短期間で平氏一門の終焉をむかえる。知盛もまた、壇ノ浦の戦いで生を絶たれた。

『平家物語』は史実に近い形で、死と生が物語として展開していく。史実の中で、生と死はさまざまな形となって人々の前に立つ。死の中に生を生きる者たちにとつて、生とは、いかなるものだったのか。平清盛、平重盛、平重衡に続き、平知盛の死生観を考察する。

II. 「見るべき程の事をば見つ」人、平知盛

一・平知盛の生誕と知盛略通史

平知盛は一一五二(仁平二)年間年に生まれ、三三年間の生を生き、一一八五年(文治元・元暦二)年の壇ノ浦の戦いで生を閉じた人物である。平清盛と時子の第二子として生まれている。異母兄に、母を右近将監高階基章の娘とする平重盛、平基盛がいる。高階基章は、生没年は未詳であるが、平安時代末期の廷臣であった。

平知盛には、母時子を同腹とする兄宗盛、弟重衡、妹徳子がいる。時子の父は兵部権大輔平時信、母は大膳大夫藤原家範の子である。「平

家にあらずんば人にあらず」と評した時忠は時子の弟に当たると。知盛は平清盛の三男として成長する。

「公卿補任」の記事によると、知盛は、一一五九（保元四）年一月七日、僅か八歳で藏人補任、「同年一月二日藏人、五位の位階叙爵を賜る」と記されている。この階位は、平治の乱の同年一月に藏人に任命されていることから知盛は前年一二月にはすでに元服済みであったはずだ。従五位下となった知盛は、翌年には武蔵守、翌々年に左兵衛佐を兼ね、二六歳で従三位に叙され、公卿に列することになる。一一六〇（永暦元）年に武蔵国の知行を務め、その年に東国方面にも勢力を伸ばすといった行動をとっている。一一六八（仁安三）年に正四位下、間に春宮大進、中務権大輔を歴任、左近衛中将となる。一一七五（安元元）年に起きた延暦寺の強訴では、内裏を守りぬいた知盛の武勇を知らしめる結果となったが、翌年院の近臣の藤原光能が藏人頭に任じられたことにより平氏と後白河との間には軋轢が生じ始める。この一一七五（安元元）年の延暦寺の強訴の翌年、一一七六（安元二）年、公卿九条兼実（兼実）は日記『玉葉』の一二月五日条には、知盛は、清盛の「最愛の息子」と記された。

平知盛は、一一七七（安元三）年二六歳で従三位非参議、一一七八（治承二）年丹波権守を兼ね、翌年春宮権大夫、同年中将を辞し右兵衛督、左兵衛督に転じる。一一七九（治承三）年一〇月に延暦寺堂衆の追討使（『玉葉』一一七九（治承三）年一〇月一九日条）となるが、その年の治承四年五月に生死を伴う重病（『玉葉』一一八〇（治承四）年一〇月九日、一二日条）を患ったにも関わらず、近江で源氏を一時的

に破ったのが（『玉葉』一一八〇（治承四）年二月二日、一五日条）治承四年二月だった。一一八〇（治承四）年には以仁王が反乱を起こし、源三位頼政の謀叛の追討に知盛が大将軍として出動し大きな戦功を挙げ、新院別当、正三位、翌年の一一八一（養和元）年参議、一一八二（寿永元）年権中納言・従二位となる。

しかし、翌年の二月（『玉葉』一一八一（治承五）年二月二日、一六日条）には、再び病となり都に戻っている。その二年後の一一八三（寿永二）年、知盛は都落ちの直前、瀬田の防御につく（『吉記』一一八三（寿永二）年七月二二日条）ことになる。平氏の都落ちはその直後であり、知盛は水軍を率い長門の彦島に拠点を置く。翌年の一ノ谷の戦い（一一八四（寿永三）年）で、子の知章、家来の監物太郎頼方を犠牲として自らは平家の船に逃れた。

一ノ谷の敗戦は、壇の浦へと平氏を導いていく。知盛は当初より長門国の彦島を陣地とし源氏軍に備えており（『吾妻鏡』一一八五（元暦二）年二月一六日条）、知盛が彦島を拠点に、兄宗盛は東の讃岐国の屋島を押さえることで覇権の維持は期待できたが、源義経の奇襲で屋島の拠点が失われ、残るは知盛率いる彦島が一門の頼りの場となった。しかし、奮闘の甲斐もなく知盛は一一八五（文治元）年、壇ノ浦で壮絶な最期を遂げた。

平知盛は八歳にして藏人補任、藏人、五位の位階を叙爵し、二六歳で従三位に叙され、公卿に列するという異例の昇級と、知力、武力も備わった人物として公卿の記録、日記等に記載されている。『平家物語』の中で知盛の活躍する姿が映し出されるのは、重盛、清盛が没

した後の都落ちからであり、この早急な昇級と武力、知力、冷静、判断力を持った人物が物語の中で平家一門の都落ちまで浮かび上がらなかったのは平家一門の中でどのような存在であったのか不思議でならない。

知盛の妻（一一五二年―一二三一年）となりし人は、平時子に仕えた当時は名を「南御方」と称していた。その縁で知盛の妻となり、一六九九年に知章を出産。『山槐記』^{（註五）}（一一七九（治承三）年二月二十八日条）によると、一一七九年に高倉天皇の第二皇子守貞（後高倉院）の誕生により乳母となり、後高倉院のもとでは候名を治部卿局と改めている。一一八〇年に知忠を出産、一一八一年に娘（後の中納言局）を出産する。一一八二年の都落ちでは皇子を伴い、その三年後一一八五年に都に戻った後、皇子が上西門院（後白河院の姉）の養子となり門院に仕えたことから官旨局と改名し、承久の乱後は四条局と称した。壇の浦から妻が親王を連れて帰る様子を『明月記』^{（註六）}（一二三〇（寛喜二）年五月一三日条）は「夜に入り宗弘を以て、後高倉院四條局中風の病を訪ふ。近日俄に中風の由、狂聖丸一昨日之を語る。今年七十九と云々。昔八条准后家、南御方と称す。知盛卿愛して妻となす。後七条院に参じ後高倉院を養ひ奉る。西海より帰るの後上西門院官旨、御乳母となす。承久三年の後又執権。近年手疼き、近日片身忽ち動かずと云々。息女黄門、返事を示す。」と記している。『名月記』によると、後堀河天皇が即位し、守貞が後高倉院となったときには、知盛の妻は執権を摂ったと記され、一二三一年、八十歳で生涯を閉じている。知盛の娘は、後鳥羽院の近臣に嫁ぎ、承久の乱で夫を失っているが宮中

に留まっている。

二・平知盛のパersonality

『平家物語』の人物は、様々な人間性を持つ人々として描かれている。平清盛は院の性格を捉えながら付かず離れずの接点を巧みに交わす傲慢な野心家として描かれ、息子の重盛は、「知」の人、「徳」の人、父親に対して道義を正す聖人君子であり頼もしい正義漢を貫く人物として描かれている。宗盛は、人一倍子に対しての情が深い人物でありながら、武士として無能で臆病な平家の棟梁の二代目として描かれ、平家滅亡という一族の悲劇で、総帥の無能さを強調されている。その『平家物語』の中で異色な描かれ方をされているのが新中納言平知盛だ。

平知盛は『平家物語』の都落ちから人格を持ち始める。頭脳明晰、鋭い洞察力、冷静な判断力、確固たる意志を持ち、その人格は果敢でありながら寡黙な人物として宗盛と対照的に描かれ、冷静な知性と判断によって事態に対処する賢と勇を持った人物、その反面人間的弱さを吐露できる人物であり、定められた運命を最期に受け入れた人物といえる。物語は知盛の生き様を通し、人間には優劣があること、正邪が宿っていること、その中で命がある限り運命を生きなければならぬ思いを語らせている。

清盛亡き後、知盛は総帥宗盛に代わり軍事面の事実上の総指揮官となる。知盛には、冷静な頭脳と確固たる意志が備わっており、その才能は合戦において平家を勝利に導いた。一門にとって知盛の功績は期

待と信頼にかわっていった。一一七九（治承三）一〇月の延暦寺堂衆の擾乱追討、一一八〇（治承四）年五月の以仁王追討時の園城寺攻撃に知盛は公卿の身で追討にあたっている。

一一六〇（永暦元）年に武蔵国（現在の東京都、埼玉県、神奈川県）の知行を務めた際は、源氏の勢力が強い東国方面に勢力を伸ばし、その土地から家人を多数獲得している。知盛には人を惹きつける独特の力が備わっていた。

知盛は感情の変化を表に出さず無表情で発言する人物だったようである。重衡のような社交性はなく、近づき難い印象を持つが、知盛の表情には微細な変化があったようだ。

知盛の人間像は『平家物語』巻七にも見られる。合戦における殺傷の数がものをいう時代、そうした数が武勲を成立した時代である。その時代の中で知盛の異質性に重盛の性格が垣間見られる。

平家の都落ちの際、知盛は、

「御運だにつきさせ給ひなば、これら百人千人が頸をさらせ給ひたりとも、世をとらせ給はん事難かるべし。古郷には妻子所従等いかに嘆きかなしみ候らん。若し不思議に運命ひらけて、又都へたちかへらせ給はん時は、ありがたき御情でこそ候はんずれ。ただ理をまげて本国へ返し遣さるべうや候らむ」（『平家物語』巻七「聖王臨幸」）

と、東国の武将である畠山重能、小山田有重、宇都宮朝綱の処刑を、平時忠とともに助命し、帰郷させている。残された人々の悲しみを気遣い命を生かす提言を知盛に託し、「ぬげがらばかり西国へ召し具す

べき様なし」（『平家物語』巻七「聖王臨幸」）との宗盛の言葉には、生に対する人間性が見出せる。『平家物語』の記載には知盛、宗盛の人間的な温情がみられるが、『平家物語』の「屋代本」や『平家物語』の「百二十句本」^{（註八）}では、宗盛は

「大臣殿、計に、此等カ首ヲ可レ被レ刎ト宣ヒケルヲ、平大納言、新中納言ノ被レ申ケレハ」（「屋代本」）と主張し、それに対して、「延慶本」^{（註九）}では平時忠と平知盛の言、

「ヨリフシ在京シテ大番勤テ有ケルカ鳥羽マテ御共シテ何クノ浦ニモ落留ラセマシマサム所ヲミヲキ進セムト申ケレバ」（「延慶本」）

に宗盛が答えるという記載だ。「延慶本」では、「斬る」「とめる」といった言葉は記載されていない。また、

「西国へぐし下て斬るべしとさた有りけるを」（「長門本」^{（註九）}）
に対して、

「源氏の世になりてのち、貞能宇都宮を頼みて東国へ下りければ、昔のよしみ忘れず、申預り芳心しけるとかや」（「長門本」^{（註九）}）

と、貞能の助命を乞う言葉の記載だけとなっている。諸本に差異が見られることで、人物像としての人間性や性格が揺れる。

宗盛は都落ちを決定したが、その時の「なしまゐらせてみばや」（『平家物語』巻七「主上都落」）の言葉には将来性がなく、一門の反対の中でも特に知盛は反対だった。後白河法皇が平家方より離反したとなると、平家は賊徒となる。朝敵になることは平家の滅びへとつながる。それは避けなければならぬ。しかし、事態は平家を滅びへと導

いていた。

「事ノ次第筆墨モ及ビ難キカ」(『吉記』七月二五日条)、「巳ノ刻ニ及ビ武士等主上ヲ具シ淀地方ニ向ヒ了ンヌ者、鎮西ニ籠在ト云々。前内大臣已下一人モ残ラズ、六波羅、西八条等の舎屋一所モ残サズ、併テ灰燼ト化シ了ンヌ 一時ノ間、煙炎天ニ滿ツ」(『玉葉』七月二五日条)ともに同日条として記されている。

また、義仲の和睦の申し出に対して宗盛を制したのは時忠と知盛だった。知盛の果敢さから見れば、宗盛の一心は受理できないものでもあった。

「たとひ世末になつて候へばとて、木曾などに語らはれて、いかでか都へ上らせ給ふべき。十善の帝王、三種の神器を帯して渡らせ給へば、甲を脱ぎ弓の弦をはづいて、これへ降人に参れと申させ給ふべうもや候ふらん」(『平家物語』卷八「法住寺合戦の事」という。知盛の平家一門というプライドの強さが現れた言葉である。木曾軍との連携か、重衡と三種の神器を交換するか判断を冷静に宗盛や時子に見せる。源頼政が反旗を翻したとき、反乱を鎮圧する。木曾義仲との水島の合戦では木曾軍を打ち破る。平家の中でも知盛の最も華々しい活躍である。

壇の浦の合戦の最中、知盛は「世のなかいまはかうと見えて候」「見ぐるしからん物どもみな海へいれさせ給へ」と、自ら船中のものを海に投げ入れる。残る名の恥を避けようとする知盛は、最後まで生きてきた人物であった。

知盛にはもう一つ「情」を知る人物としての側面がある。東国下層武士ながら強弓精兵の兄弟。平家方に討取られた頸を目にした知盛は、「あ(ツ)ばれ剛の者かな。これこそ一人当千の兵ともいふべけれ。あ(ツ)たら者どもをたすけてみで」とその死を悼んだという。知盛の慨嘆と死を悼む心情は、情けを知る人、それが知盛の一面として知られている。貴族化した平家の中で、貴人と武将の二面性を兼ねた知盛は、鋭い洞察力、冷静な判断力、果敢さにおいてものごとの判断をしてきた。その知盛も一ノ谷の戦い(一一八四(寿永三)年)で、子の知章、家来の監物けんぶつ太郎頼方を目の前で失う。子の犠牲によって、父は生を存続した。宗盛の弱性部分はときとして知盛をくじかせ、生への継続の欲望を知った人間として、知盛は常に運命という言葉に支配された人物だった。

三. 謡曲に見る平知盛

(一) 生きていく知盛「船弁慶」

「さしもにわが朝の重宝、三種の神器を都へ返し入れ奉ったりとも、重衡返し給らむ事ありがたし。たゞそのやうを、おそれなく御請文に申させ給ふべうもや候らむ」(『平家物語』卷一〇「請文の事」)

知盛は、重盛亡き後平家を支え、道理にかなうしつかりとした意見を述べる人物であった。平家一門の中でもっとも頼りとされた人物であったといえる。壇の浦での合戦時、

「いたう罪なつくり給ひそ。さりとしてはよき敵かは」(『平家物語』

巻一一「能登殿最期の事」)

暴れまわる教経に知盛は、すでに死に行く者として罪を重ねることを制止する。義経は屋島の合戦以来、宿敵である。ただ一点、教経は義経だけに的を絞る。

「見るべき程の事を見つ。今はたゞ、自害をせむとて、乳母子の

伊賀の平内左衛門家長を召して、日頃の契約をば違ふまじさか」

(『平家物語』巻一一「内侍所の都人の事」)

知盛は、一族が減びる運命とわが身の死を受容する。従人家長は知盛に鎧二領を着せ死の受容の共同体として、知盛同様に出で立ちをして手に手を取り一緒に海へ沈んでいく。知盛は、全て見極めたのだ。その見極めが、生を断ち切る決心をさせた。その中には、親の身替りに無残にも討たれた嫡子知章の討死も含まれている。知章は享年一六歳だった。

謡曲「能」では、怨霊説がある。

「西の風忽ちにはげしう吹き忽けるは、平家の怨霊とぞ聞えし」

(『平家物語』巻一二「判官都落の事」)

と記されているように、そのころの平家には知盛の怨霊説が世俗間にあった。能の「船弁慶」では、囃子が「波頭」という手を打ったその時平家の怨霊が現れる。知盛が「早笛」にのり黒頭を振り乱して現れるといった趣向となっている。「見るべき程の事を見つ」者が怨霊と化すことの哀れさがそこに漂う。

(二) 生きている知盛「義経千本桜・渡海屋・大物浦」

当時の庶民の知識は、『平家物語』の流布によって形成されていた。その民衆が作り出したのが「平家の落人部落」であり、「諸行無常」は哀れみを生み民衆のころとなつて伝説となつていった。壇ノ浦の合戦は平家一門が源義経によつて滅亡する歴史上の事実である。安徳天皇は祖母(二位の尼)に抱かれて入水、平知盛は壮絶な最後を遂げる。

義経は兄頼朝に追われ、大物浦からの船出が嵐でかなわず奥州へ落ちていく。これも歴史上の事実である。この時、義経の西国落ちを阻んだのが平知盛の怨霊であるとして書かれたのが、能「船弁慶」(観世小次郎信光作)だった。この「船弁慶」をもとに作られたのが浄瑠璃「渡海屋・大物浦」だ。

浄瑠璃では設定が異なり「義経の西国落ちにを阻んだのは知盛の怨霊ではなく、まさしく知盛本人が壇ノ浦を生き延びて密かに義経を討つ機会を狙っていたのだ」となる。「大物の沖にて判官に怨をなせしは知盛が怨霊なりと伝えよや」と最後に碇をかついで知盛は入水する、という内容に変わっている。死して怨霊となるよりも、生きて義経を討つ方が、より人間的という感覚であつたようだ。

浄瑠璃は「壇ノ浦」の経過を舞台でたどっていく。知盛以下手下等は幽霊の装束で義経一行を襲う。「事が成功した後に知盛が生きていたと分かつては後が面倒になる。ここは幽霊が義経を討つたということにして源氏の目をくらませよう」という魂胆を知盛が言葉にする。知盛のこの計略は義経に見破られ、知盛一行に提灯松明を突き付け反撃する。知盛の敗北によつて、典侍の局の目の前で、「冥土の御供仕

らん」と入江丹藏が刀を突き立て海に飛び込む。続いて典侍の局も安徳帝を抱きかかえて入水する寸前に義経に押さえられる。「平家滅亡」の現実を浮き彫りにするのである。生きている知盛はやはり怨霊とすることに、知盛は民衆の中に生きているのだ。

知盛はこの「大物浦」ではこの世の怨霊の形相となる。最後の戦いを挑む知盛の前で典侍の局が自害し、安徳帝は

「朕を供奉し、永の介抱はそちが情。けふ又まろを助けしは義経が情なれば、仇に思うな知盛」

と言葉を残す。知盛が入水を決意する出来事なのだ。知盛の最後の科白は「きのうの怨はけふの味方。あな心安や嬉しやな。是ぞ此の世の暇乞い」だ。

「知盛の入水は「自殺」ではなく、「生きている怨霊が本来のあるべき世界へ還る」という意味を持つ」と白州正子氏は言う。

Ⅲ. 子を失う親の悲しみ

一. 死と愛

愛する者の死は、人生の最も悲痛な体験であり最大の悲劇だといえる。死は人間としての尊厳を失い、肉体も人格も破壊する。愛とは、人間生活に重大な影響を与えるものだ。愛には、父性愛、母性愛、子としての愛など代表的なものばかりではなく様々な愛があり、その全ての愛が人としての生き様を生み出す。愛と死は人間の心の中でかなり深い部分で結ばれている。死は人間にとって重大であり、人間の根本的な倫理を司っている。死と愛の関係が人間の生きる上で厳粛であ

るのは固体である人間性を生み出すからだ。「太陽と死と、この一つものを人間は見詰めることができない」（ロシユフ・コフ）と言うように、誰もが見詰めることの出来ない死を、必ずどこかで経験するのだ。「人間は死ぬものであることを人間は知っている、その点で人間は偉大なのだ」（パスカル）、しかし、死は悲しみであり、恐怖であり、理性の上では納得できないことだ。憂いを持って「生死一如」という仏教表現が物語っている。

(一) 知盛の子たち

知盛には治部卿局との間に三人の嫡男がいる。知章・知忠・知宗である。また、娘は後鳥羽院の近臣に嫁いでいる。『平家物語』の父と子の別れは知章が主だが、簡単に三人を捉えてみる。

長男の平知章は、一一六九（嘉応元）年に生まれ、一一八四（寿永三）年没。平家滅亡の前年に父親従二位中納言知盛の身代わりとなって死去。知章は、従五位上、左馬頭兼武蔵守だった。一ノ谷の合戦で全軍総崩れの中、知盛と知章、家人監物太郎頼方の主従三騎で落ちていくところに、源氏が追い付く。源氏方の大将が知盛に組み付こうとするのを知章が身をもって防ぎ、駆け付けた童武者に首を取られる。

次男平知忠は、一一八一（養和元）年（一一七七（治承元）年）に生まれ、一一九六（建久七）年没。知章の同母弟。三歳で従五位下、伊賀国で育ったので伊賀大夫と呼ばれる。『平家物語』によると、寿永二年の平家都落ちの際、知盛の乳母の夫・紀伊次郎兵衛（橘為範）に預けられた。建久五・六年頃、為範は成長した知忠を伴い、京都法性

寺の一橋のあたりに忍び、反抗のすきを伺っていたが、密告により検非違使の追捕を受け、そこで自害。知忠の首実検には、実の母である治部卿局があたっている。

三男平知宗は、一一八四(寿永三)年に生まれ、一二五五(建長七)年没。鎌倉時代、平家の落人となっている。大宰府北殿で死去。享年七二歳。子に宗重尚、宗助国がいる。幼名は鬼王丸で、別名は貞重、盛重。通称は武藤武者、武藤右馬助、惟宗判官。惟宗知宗や宗知宗、武藤知宗とも名乗っている。

(二) 息子知章との別れ

子を失う親の悲しみは、現代哀歌を共にする。

「監物太郎は究竟の弓の上手ではあり、ま(ツ)さきにく、んだる旗さしがしや頸の骨をひやうふつと射て、馬よりさかさまに射おとす。そのなかの大将とおほしき者、新中納言にくみ奉らんと馳せならべけるを、御子武蔵守知章なかにへだたり、おしならべてむずとくんでどうとおち、と(ツ)ておさえて頸をかき、たちあがらんとし給ふところに、敵が童おちあうて、武蔵守の頸をうつ。監物太郎おちかさな(ツ)て、武蔵もりうち奉(ツ)たる敵が童をもう(ツ)て(ン)げり。其後矢だねのある程射つくして、打物ぬいてたたかひけるが、敵あまたうちとり、弓手の膝口を射させて、たちもあがらず、あながら討死して(ン)げり。」(『平家物語』巻九「知章最期」)

知章の最期が語られた部分だ。この文だけで、合戦の残酷さが映像

のように脳裏に刻み込まれる。武蔵守である知章が武蔵の児玉党の武者に討たれる。迷いなく父を守る姿、戦いの極限状態の中で一六歳の知章は判断をするのだ。現代の一六歳の少年が、精神的極限状態の中で、父を殺すことはあつても父を守ったという美談はあまり聞かない。合戦時代の環境の下、現代と重ねると死と武士の精神を語ることはできないが、覚悟という重さは比較できる。家名と名誉と絆、一六歳の少年の心身全てを支え緊張感の内側に自己成立を完成させた知章の覚悟。家名のために、名誉のために、父との絆のために、死を向かえる勇気を生み自己犠牲の中に知章は何を見ていたのか。知章に「自己犠牲」が値したか否か。現代小説の『塩狩峠』に見る「自己犠牲」は、「自己犠牲」として自らの命を差し出したのではなく、人々の命を救うという使命感によって行動された死であり、自らが自らに架した死であると解したとき、それは「自己犠牲」でなくなる。知章の死は、父を救う使命感と、父を救った強固な意志の精神的満足感さえ感じさせる。持続してきた生と自己の断絶との選択、極限状態の中で冷静な判断を下したことで犠牲か否かの分岐点となる。親子・夫婦の絆が引き裂かれる場面の多くに戦いの悲惨さがその悲しみを語る。死から逃避する者、生を一瞬輝く者、武士の振る舞いとはいかなるものを語りかける。

二・父知盛の苦界

「武蔵守におくれ候ぬ。監物太郎うたせ候ぬ。今は心ほそうこそまかりなりて候へ。いかなる子はあて、親をたすけんと敵にくむ

をみながら、いかなるおやなれば、子のうたる、をたすけずして、人のうへで候はばいかばかりもどかしう存候べきに、我身の上に成ぬれば、よう命はをしい物で候けると今こそ思ひしられて候へ。人々の思はれん心のうち共こそはづかしう候へ」（『平家物語』巻第九「知章最期」）。

父知盛は息子知章の死を目前で見ながら、武将としての父はどうすることも出来なかった。「よう命はをしい物」（『平家物語』巻九「知章最期」）と亡骸さえ置き去りにして逃げた父知盛の懺悔、「人々の思はれん心のうちどもこそはづかしう候へ」（『平家物語』巻九「知章最期」）と泣く知盛。「生死の境に立てば子をさえ見殺しにする人間の生への執着と利己心の恐ろしさを、そのままさらけだしている」（岩波新書『平家物語』）と石母田正氏は指摘する。親子の情愛の欠如は子の孝に置き換えた形で『平家物語』は語る。

知盛は二人の討ち死を背に、名馬と共に味方の船にたどり着く。子と家人の捨てざりし命の上に成り立った命、存命の知盛は自責の念が複雑に絡み合い苦渋の心中を兄宗盛に語る。「いかなれば」と語る知盛は「よう命はをしい物」と思い知ったという。自身の中に不気味で恐ろしいほど命への執着があった。非感覺的な永遠の真实性、人間の心的内容である観念、認識の限界や目標を定める規制的原理、絶対的な実存を意味するものとしての理念も、人の行うべき正しい道としての道理も、体験を通してのみ現実化する。

父としての自らを曝け出した知盛の行動を、宗盛は「武蔵守の父の命にかわられけるこそありがたけれ」と知章を賛美し、わが子宗清に

涙する。父としての知盛に対する行動には触れない。家人監物太郎頼方もまた主君を逃がすために壮絶な最期を遂げた。孝と忠と情愛の先にあるもの、それは一体何であったのだろうか。

宗盛と知盛のパースナリティーの違いは大きい。宗盛は鮮明にもその見ない近視眼的な描写で人間性が語られており、子を持つ親の涙としては知盛とは全く対照的だ。「よう命は惜しいもので候ひけりと、今こそ思ひしられて候へ。」と深層から絞り出す知盛の涙は、人間存在の本質の域に達した悲哀の涙そのものだ。何時の世も戦争は人間性を失わせる。戦争の極限状況は、人間生存の極限状態を知らしめる。命を顧みずに戦う極限状態に追い込まれた人間が、わが子のためでも死せざと思う生への執着は、本来の人間性といえる。現実の重さを直視し冷静なる目を持つ知盛に、棟梁としての宗盛の目は及ばなかった。理性と感情は人間性を二分する。知盛は武将であるべき人だった。現に、宗盛に代わり軍事を行い、橋合戦、州侯の合戦、水島・室山の合戦では、重衡や教経と共に平家軍の武将として幾度となく勝利を収めている。

名馬井上黒と共に命をとりとめた知盛は、宗盛の船まで泳ぎ着くが、馬の乗船は到底できず沖に追い返そうとする。平家の一人が、敵に渡すには惜しいとその名馬を射殺そうとしたのを止めた知盛である。

「何の物に成ばなれ、我命を助けけたらん者を。有べうもなし」
（『平家物語』巻九「知章最期」）

名馬は岸へ泳ぎつき、船のほうを見返り嘶いたという。この時、知

盛は存命した名馬と断絶した生の子知章を重ね合わせたに違いない。本来なら、子知章の命を救いたかつたはずだ。せめて、愛馬だけでも助けたいと思う心情の動きが起こつても不思議ではない。知盛の有能で勇ましい大將像は、人間的な弱さと情をも持つひとりの男として子知章の残像を留めるように描かれている。

IV. 平知盛の死生観

『平家物語』は死の有様が数多く描かれている。斉藤実盛、木曾義仲、平忠度、平敦盛、佐藤継信、平知盛といった合戦での討ち死にが数多く描写され、その死に方はどれも壮絶な最期である。平知盛もまた、合戦の後自ら進んだ覚悟の死道だった。『平家物語』は、史実をもとに戦乱を通し滅亡していく「家」と「その家」に生きた人々の生と死の歴史上の事実だった。

一・知盛の役割の変化

一の谷の合戦を境に知盛の役割が一門の中で変化したのは明らかだった。合戦という死闘の中で、平家の多くの武將があらゆる死に様で世を去った。知盛は兄宗盛の力量不足故に軍事の指揮者から棟梁としての実質的な存在となつていった。息子知章を失い失意の心情を一門に露わにした知盛は、自らの失意が一門の士気の下降をたどることとを恐れ、一門の士気の鼓舞と、兄宗盛の励ましに力を入れるといった、精神的緊張を解くことなく義経に追われ壇の浦へと向つた。

『平家物語』では、一一八〇（治承四）年五月の以仁王事件の際の知

盛は宇治に向かう大將軍の一総大將として描かれている。

「さる程に、宮は、宇治と寺との間にて、六度まで御落馬ありけり。これは去んぬる夜、御寝ならざりし故なりとて、宇治橋三間引き放し、平等院に入れ奉り、暫く御休息ありけり。六波羅には、「すはや、宮こそ南都へ落ちさせ給うなれ。追つかけて討ち奉れや」とて、大將軍には、左兵衛督知盛・頭中將重衡・薩摩守忠度、侍大將には、上総守忠清・悪兵衛景清を先として、都合二万八千余騎、木幡山うち超えて、宇治橋の詰にぞおし寄せたる。」（『平家物語』四「橋合戦」）

同年一月に近江（滋賀県）で山本義経・柏木義兼らが蜂起する。同年二月一日、福原から京都に戻つた平氏は反撃に転じた。これが「園城寺炎上」である。同月二日には大規模な追討軍が派遣される。平知盛は近江、資盛は伊賀、清綱は伊賀から進み、両軍は駿河（静岡県）まで進む予定だった。知盛は義経・義兼に勝利したが、源氏の残党が延暦寺内源氏派とともに園城寺に籠り、平知盛らを脅かすこととなつた。

『資料総覧』には平維盛の記載がある。「平維盛ヲ越前国二遣シ、叛徒ヲ討タシム」（同年一二月二日条）と記されているが、その出典は『山槐記』の「右少將維盛朝臣、越前国（福井県）に下向す。かの国まま叛逆の輩あり。件の事を鎮めんがためなり」（同日条）によるものである。『玉葉』と『山槐記』の記事には矛盾があり、『玉葉』の二三日・二五日条では、平維盛は近江から美濃（岐阜県）・尾張（愛知県）に向かつている。

同年一二月二八日、平重衡は奈良の東大寺や興福寺を焼打ちする。知盛は美濃（岐阜県）・尾張（愛知県）に追討軍を進めたているが、知盛の病気の帰洛により、替わって重衡が美濃まで鎮圧する。結果的に知盛らは東征の成果をあげている。

『平家物語』巻四の「橋合戦」は、以仁王の乱、源頼政の挙兵とも呼ばれる。以仁王の挙兵は一一八〇（治承四）年に高倉天皇の弟宮である以仁王と、源頼政が打倒平氏のための挙兵を計画し、諸国の源氏や大寺社に蜂起を促す令旨を発した事件である。この事件は露見し追討を受け、以仁王と頼政は宇治平等院の戦いで敗死、早期に鎮圧された。これを契機に諸国の反平氏勢力が兵を挙げ、全国的な動乱である治承・寿永の乱が始まる。

二六日、両軍は宇治川を挟んで対峙した。この宇治川は、琵琶湖から流れ出る唯一の河川で淀川と呼ばれ、瀬田川、宇治川、淀川と名前を変えて大阪湾に流れ込んでいる。滋賀県、京都府及び大阪府を流れる淀川水系の本流で一級河川と定められ流路延長七五・一キロメートル、流域面積八、二四〇平方キロメートルの単位をもっている。

頼政の軍は宇治橋の橋板を落として待ち構え、川を挟んでの矢戦となった。宇治橋は「瀬田の唐橋」と「山崎橋」と共に、日本三古橋の一つに数えられる。宇治橋のいわれは、東詰の橋寺放生院にある「宇治橋断碑」に刻まれている。断碑の上半分は、奈良時代のものと言われ、江戸時代に境内から掘り出され、下部を補ったものである。その断碑には、宇治橋を架けたのは僧道登とあるが、『続日本紀』^(註一〇)は道昭と記されている。『延喜式』^(註一一)には、「宇治橋ノ敷板、近江国十枚、丹波国

八枚、長サ各三丈、弘サ一尺三寸、厚サ八寸」とある。『平家物語』巻四の「橋合戦」は、頼政方の五智院但馬や淨妙明秀、一来法師といった強力な僧兵たちの奮戦が描かれている。攻めあぐねた平氏の家人・藤原忠清は、知盛に河内路への迂回を進言した。下野国の武士足利俊綱・忠綱父子はこれに反対し、「騎馬武者の馬筏で堤防を作れば渡河は可能」と主張している。一七歳の忠綱が宇治川の急流に馬を乗り入れると、坂東武者三〇〇余騎がこれに続いている。知盛は病により尾張から海戦前に帰邸したが、『平家物語』巻六「祇園女御」の段によると、勝利を収めた後の退却としている。物語前半の知盛は武将の面をより強調しているが、この二つの戦いは、弟の重衡に託されていた。

この合戦に『平家物語』は知盛を登場させ、しかも知盛が都に引き上げたことを憫れんでいるが、『源平盛衰記』^(註一二)には重衡、維盛の大将名の記載があっても知盛の名前の記載はない。史実書としての『玉葉』^(註一三)『百鍊抄』^(註一四)『明月記』も同様に知盛の名は記されていない。

知盛は常に兄宗盛と対峙された人物である。都落ちの際の意見の対立、壇の浦の合戦に及んでの裏切りへの透視など、宗盛との果敢と洞察力の違いの対比がなされた人物であった。また、宗盛には到底理解できない人間の本质を見た人物でもあった。

二・中世の死と生

死を常に目前にして生を生きた『平家物語』の人物たちにとって、確かな実存として明確に存在した死後の世界、死後の時間。『平家物語』は冥土の光景を清盛に重ね記述する。

「其躰冥土にて、娑婆世界の罪人を、或は業のはかりにかけ、或は浄頗梨のかがみにひきむけて、罪の軽重に任つつ、阿防羅刹が呵嘖すらんも、これには過じとぞみえし。」(『平家物語』巻二「小教訓」)

娑婆世界の罪人の審判、罪業の透視、罪業を秤にかけ換算する。死後の世界で正邪の裁きを受け、所業の評定が決まる。死の世界は生者の世界に接続しており、生前の所業によって肉体の死後、生界と死界とのつなぐ生命認識として、痛みや意識の覚醒を蘇らせそのつながりを保つ。生者によって死後の世界は意識され、生者が生を象徴する。重盛の死(自筆論文「平家物語の死実の史」)も重衡の死(自筆論文「史実に見る『平家物語』の人物の死生観」)も、死後の世界の存在を独自に捉えた死出であった。死後の風景を描き出し、死後の生を創り出したのも『平家物語』の人物であり、非日常を繰り返す日々に生きたのも中世の人物たちであった。それもまた、まぎれもなく中世思想の中に創り上げた死生観の形式だった。

三・知盛の死生観

(一) 知盛の「あきらめ」と「悟り」

「船の屋形に立出で、大音声を上げて」、「軍は今日ぞ限る。者共少もしりぞく心あるべからず。天竺震旦にも、日本吾朝にも、雙なき名将勇士と云えども、運命盡ぬれば力及ばず。されども名こそ惜けれ。東国の者共に弱気見ゆな。いつの為に命をば惜むべき。唯是のみぞ思ふ事」(『平家物語』巻一一「壇浦合戦」)。

合戦という極限状態を強いられた武者たちの死に立ち向かう精神力を一樣に保たなければ、戦は負ける。その精神力を奮い立たせる役目を持つのは本来宗盛だ。その役割もまた知盛が背負った。しかし、この追い詰められた状況の中で知盛は武者に飛ばす檄と共に見たものは、阿波民部重能の裏切りの素振りだった。知盛はいち早く重能の裏切りの行動を見抜いている。棟梁としての力量が薄い宗盛は周囲にも鈍感で、阿波民部重能の裏切りを察知できず、結果として平家は敗北を蒙ることになる。平家は四国勢のうちでもこの豪族である重能を最も頼りにしていた。しかし、重能は、屋島の合戦で息子教能を生け捕りにされており、すでに源氏に内通していた。棟梁宗盛は知盛の進言「重能を討つ」ことへの許しを出さなかった。知盛は人を確かな目で捉えられる人物だ。宗盛が信じた重能の内通は、源氏にこの壇ノ浦での秘策を流し重能は早々に平家に背く。結果的に平家を滅ぼすに至った。

壇の浦は現在の下関。『平家物語』には「長門国は新中納言知盛卿の国なりけり」(『平家物語』巻八(寛一本))

と記されている。この長門国は知盛と深い関わりのある土地であった。知盛は彦島(下関)に陣を構え、義経軍を迎え討つ体制を整えた。一一八五(文治元)年のこの壇の浦の合戦は、知盛に「あきらめ」と「悟り」を明瞭化させ、運命に抗うより定められた運命を受け入れる知盛の死生観が浮き彫りにされている。知盛の「あきらめ」と「悟り」は壇の浦合戦以前にも見られ、都落ちの際、冷静な判断によって東国武士の処刑を宗盛に留まるよう申し出ている。

「御運だに尽きさせ給ひなば、是等百人千人が頸を斬らせ給ひたりとも、世を取らせ給はん事難かるべし。故郷には妻子所従等如何に嘆き悲み候らん。若し不思議に運命開て、又都へ立歸らせ給はん時は、有難き御情でこそ候はんずれ。只理を枉げて、本國へ返し遣さるべうや候らむ。」(『平家物語』巻七「聖主臨幸」)

知盛の死生観は、「運命とは人知の及ばない力に支配されている」と確信した結果である。知盛は、「平氏は滅亡すべき運命にある」と予言した重盛とは違った見識を持っていた。知盛は、どれほどの勇者でも運命は尽きると識った人物だった。

「汝等が魂は皆東國にこそあるらん、ぬげがらばかり西國へ召具すべき様なし。急ぎ下れ」

知盛が東国武士に向って下した言葉には、知盛の生き様を通して捉えた運命が、人間洞察を鋭利に磨き上げたといえる。また、合戦という悲惨な状況下で子供を見殺しにした後悔もまた人間の偽りのない心情の表出として、知盛の精神的な鋭敏さを増したといえる。

『平家物語』は、冷静な知性によって事態への対処を貫く姿勢を知盛に与え、兄宗盛の愚行な比較描写を最期まで崩さない。過去平氏は内乱鎮圧のため、その立場と責任を持った。そして、平氏が政権の座にとどまるための唯一の手段が武力だった。一一八一(治承五)年閏二月清盛死去後、三男宗盛が三五歳で棟梁に立ち、四男知盛が三〇歳で宗盛を補佐するといった平家一門の世代交代が起こる。一門の期待は大きく、宗盛および知盛の手腕と武略に依存した。

壇の浦の合戦の残酷性は、優勢戦から形勢が逆転して絶望戦に変わ

る。知盛の中で保っていた強固な精神そのものが、まるで身体から流れ出る鮮血の如く一条の道を作り身体外を求め流れ始めたことに自身が気づいたとき、知盛の張り詰めた精神が解放されていた。死を直感したときの覚悟というべきか、悟りというべきか、精神的な安堵というべきか、どちらにしても、知盛に与えられ背負ってきた責任は水が流れ出るかのように心身から外へ流れ出たのだ。肩の荷がおりる、楽になる、そのような言葉が平知盛には当てはまる。

(二) 平知盛の運命(最期)

運命、天運、宿運。『平家物語』は古典文学の中でもひとときわ運命を語る。武士の最期は、運命が尽きれば死しかない。血族、家、一門、全ての興亡を支配する。全ての人間を漠然と動かす力、何人も抵抗できない力が支配することを、人々は運命とよんだ。知盛もまた、その運命によって生への執着を見る。人間の生への執着と利己心の恐ろしさわが身を刺す。息子を目の前で殺されるのも運命、それを助けられなかったのも運命、知盛は運命の経験を持つ人物として、平家の運命をも洞察する。一門の都落ちの際、池大納言頼盛の裏切りに

「何しか人の心共の變行くうたてさ」(『平家物語』巻七「一門都落」)

と家人を留める。知盛は、平氏の重恩を蒙った東国北国の武士でさえ「恩を忘れ、契を變じて、頼朝、義仲等に随ひき。まして西國とてもさこそはあらむずらめと思ひしかば」(『平家物語』巻一一「逆槽」)

と語る。ここでも知盛は、平氏一族の運命を漠然と観念で捉えている。知盛の洞察は、運命と武士団の動向、時代と人心の動きと結びついていた。知盛の運命の確信は、自身の積極性と戦闘性を持つ武將と成した。平氏一族に裏切や脱落者がでたことも人力では抗えない運命と受け入れられている。運命の受け入れは、裏切りり行為の受け入れではなかった。阿波民部重能の裏切りをいち早く察知した知盛、壇ノ浦合戦の直前には変心者を斬ることを強硬に主張したのも知盛だった。知盛の後悔と無念は

「やすからぬ。重能めを切て棄^すべかりつるものを」(『平家物語』巻一一「壇浦合戦・遠矢」)

へ心情がつながる。「個人の力ではいかんともしがたい運命とは、時代の変動する歴史的必然性と言い換えてもいい。それを知盛は見たといいう。」という石母田正氏の解釈に値する。

一一八五(文治元)年三月二三日、長門の海はたぎりて落つる潮の激しい潮流の関門海峡として知られる場所である。翌三月二四日卯の刻、矢合わせと定めた。平氏最後の戦いとなる壇の浦の合戦である。阿修羅のように闘う能登守教経を始め、激戦の果て平家の運命は尽きる。

知盛は運命への抵抗が無意味と知った。知盛は教経に使者を送る、「能登殿痛う罪な作りそ。さりとて好き敵か」(『平家物語』巻一一「能登殿最期」)

と。死を目前とした無益な戦いによる無益な殺生は極楽往生を妨げる。「水主梶取共、射殺され、切殺されて」船の操縦を困難とする中で

「世の中はいまはかうと見えて候。見苦しからん物共皆海へ入れさせ給へ」(『平家物語』巻一一「先帝身投」)

平氏の運命が尽きたことを知盛は確信した行動であった。武士としての誇りを重んじ、家を重んじ、恥べきものを残さぬようにとの心がけであった。歴史と人間の深層と運命を知り、極限まで追い詰められた人間の死、それに向かい合うように、天皇として、武士として、一族として守るべき名譽、遺体は残せない。平家の全滅は近い。

知盛は、安徳天皇のいる御所船に向い「世のなかは、今はかうかと見えて候ふ」と、戦局の推移を知らない天皇の周辺者に最期の覚悟を伝える。女房たちが知盛の様子に不振を抱き、「軍は如何に」と問う。知盛は

「めづらしき東男をこそ、御覽せられ候はんずらめ」(『平家物語』巻一一「能登殿最期」)

と、「カラく」と笑った。運命を見届けたものから出た言葉だった。地獄と化した戦場で、知盛は自らの死を受容する心の準備ができたのだ。死への恐怖はユーモアによって自心への余裕に変わる。そして、いかに死ぬかが問われる。恥辱、惨殺そのものしかない戦場である。個々において選べる死ではない、誰もがその恐怖と恐慌が精神を捉えて離さない。

「見るべき程の事をば見つ、今は自害せん」(『平家物語』巻一一「内侍所都入」)、知盛の最期の潔さだ。すべてを見尽くした知盛に自ら生を絶つことだけが残された。覚悟の入水。乳人子の伊賀の平内左衛門家長に向かい「いかに日頃の約束は違まじきか」と問えば、家長は「子

細にや及候」と返す。家長だけが、知盛の背負った責任の重さ、それを遂行するつらさを知っていたとこの短い返答で察しがつく。知盛が重責から解放されるべきときは、知盛の死によってであることを家長は知っていた。両者の短い会話の中には、強い絆が見える。

「鎧二領著せ奉り、我身も鎧二領著て、手を取組で海へぞ入りにける」(『平家物語』巻一一「内侍所都入」)。

知盛は、一門の死を見届け自死を迎える。大将として堂々とした覚悟の死、壮絶な最期だった。享年三四歳(満三三歳)。

『平家物語』は、末法の必然と抗うこともできない歴史の運命によって地獄と化して行く。罪と業は人々を地獄に導く。『平家物語』の人々は、ただひたすら闇に向かった。地獄と化す世界に人々の運命の受け入れと抵抗を痛いほど感じ取れる。平家の滅亡の必然性と一門の死は確実な運命だった。一門の最期まで運命に挑戦した能登守教経と新中納言知盛、その知盛の戦いにおけるの精神は武士として、平家として、また平家の大将としていかに誇り高く闘うかであった。

『平家物語』は戦いの果てに、人々の生き様を海が飲み込んでいく。栄華を極めた名誉ある一族、しかも身分の高い者の死の間際に残されたのは名誉だけだ。死の選択ができるわけではない。できるのは死に方の選択だ。その死に方はいかに名誉を保てるかという死である。天皇の尊厳、貴族の名誉、武士の名誉、女性の尊厳、『平家物語』が語る死生観に尊厳と名誉の意義を見出せば死に際の名誉の意義は大きい。「見るべきも程の事は見つ」といった知盛の見たものは、今現存する世界が地獄と化し、生きものとしての人間が塊と化して地獄へ堕ちてい

く様そのものだった。

知盛という人物は、物語における経歴だけが頼りで資料として知盛を捉えることができない。歴史上の人物としての手がかりの替わりに、運命を見た人物として描き出されている。それが『平家物語』においての知盛の役割といえる。

運命を背負い、地獄を見て逝った知盛を唯一救うのは、生き残った女房たちの感慨の思い出であった。

「新中納言ノ今ワノ時、タワブレテ宣シ事サへ思出ラレテ、悲カラズと云事ナシ」(『平家物語』「延慶本」)

いつの世も、人の死の最後の言葉は残された人々の記憶に残る。知盛が生前解放されなかった責務と精神的圧力は生き残った女房たちに救われる。知盛が聖地を求めたのも頷ける。それは、死に際して、教経の殺生を止めた言葉にも現れている。希望なき勇気で生きた人物、覚悟の名のもとに死を受容した人物、それが知盛であった。

V. おわりに

一一八五(元暦二)年三月二四日、平家滅亡の瞬間、そこには多くの死があった。『平家物語』は様々な人物を鮮明に描写する。人物を「優」と「劣」、「正」と「邪」に描写することによって、人物像はそれぞれに際立つ。『平家物語』に登場する人物の死生は、通常の死生の範囲を越え受け入れなければならなかった。現代の死生学的観点で捉えた『死ぬ瞬間』『新死ぬ瞬間』の研究で明らかになった死は、「否認」「怒り」「取引」「抑鬱」「受容」の五つの過程を踏むとされる。『平家物

『語』に登場する人物がこの五段階を経て死を迎え、往生をした訳ではない。合戦という非現実の中で、死生観を悟るより前に死した者もいる。死よりも大切なものを手に入れ、死へ赴いた者もいる。それは高度な芸術の達成であったり、人間の尊厳と名誉であったともいえる。絶望の死の先にあるもの、言い換えれば死の受容を越えた先にあるもの、その漠然としたものが死後の存在である希望となる。末法思想の観念が、死後救済される仏唱宗教として広範に受容され広まったことは、それぞれが死の美学を求めたことに他ならない。

王朝国家の崩壊は、中世に生きる人々の死生観と宗教観を変えた。一二世紀後半は、保元の乱（一一五六年）、平治の乱（一一五九年）、頼朝拳兵（一一八〇年）、平家滅亡（一一五八年）、奥州平泉滅亡（一一八九年）と内乱が続いた時代である。律令国家は約五百年を経て壊滅し、地方豪族等の莊園をめぐる争奪戦が続き、地方武士団と僧兵の武力世界が中心となった時代だった。

一二世紀から一三世紀は内乱、殺人、陰謀に天変地異、病死餓死が加わる。全てが死につながる時代であった。無常観や地獄観が武者たち拡大し、念仏が武士に結びついたとき、死がいかにいさぎよいものになるかを『平家物語』は語る。乱世が生み出した無秩序は、同時に自己の内部も崩壊する。均衡に精神を保とうとするには、自発的な自己強制が必要となってくる。生と死の狭間に生きる武士にとって、生への妄念、妄想、執着は払いきれない。戦場での人間らしさは皆無だ。殺戮を繰り返す殺人は、個人の意志と関わりを持たず死を強制する。人間の特性が人間らしさなら、戦場で鬼面と化し死を与えていく

行為もまた人間らしさとよぶに等しい。

武士にとって妄念、妄想、執着は日常において自己の精神的・極限的な格闘状態であった。信仰は人間の死の尊厳に値するという観念を武士たちは望んだのだ。人として死への恐怖を拭い去り、肉体の消滅の後に精神の生があることを死の先に見出し死していく時のその先にあるものを、見ようとしていた。

今年のNHK大河ドラマのテーマ曲とともに、遊女の嘆きを託した今様が流れる。現代人の感覚では捉えきれない音彩が肌を感じる。

「遊びやせんとして生まれけむ。戯れせんとや生まれけむ。遊ぶ子ども
の声聞けば、私が身さへこそ動ゆがるれ。」

何のために生まれ、何に向かつて生きるのか、遊女の嘆きは武士の嘆きにも聞こえてくる。

赤間神宮宝物館のすぐ裏手、紅石山を背にした平氏一門の墓平家塚（平家七盛塚）がある。平有盛、平清経、平資盛、平教経、平経盛、平知盛、教盛、後列に家長、忠光、景経、景俊、盛継、平忠房、平時子の順に並んでいる。

『平家物語』の紀要論文執筆は、法政大学名誉教授杉本圭三郎先生のご指導を頂き、完成したものである。心より、感謝いたします。

【註】

(註一)「公卿補任」藤原俊成、同定家筆。重要文化財指定一九八二(昭和五七)年六月五日。鎌倉時代。二条。ト書藤原俊成筆本自長治三年至大治三年条残簡／藤原定家筆本自建久九年至承久三年条。

『公卿補任』は、貴族の職員録で、わが国神代以降の公卿記録として知られている。この冷家泉本は藤原俊成・定家の父子がそれぞれ書写して常用した所持本である。うち俊成筆本はもと綴葉装で現在九丁を存し、長治三(一一〇六)年条から大治三(一一二八)年条に至る間およそ十年分を断続して存している。また定家筆本は綴葉装(九括)で一四八丁を存し、建久九(一一九八)年条から承久三(一二二二)年条に至る二十四年分を収め、うち建暦元(一二二二)年条以降には筆者である定家自身の補任記事を掲げている。両本とも本文の内容は流布本(『国史大系』本)に比して大異はないが、官歴の内容にしばしば異同がみられ、流布本の欠を補う点が少なくない。なお両本の断簡は「補任切」として古筆の上でも珍重されている。(国指定文化財等データベース)

(註二)『玉葉』は九条兼実の公私にわたる記録。記述は一一六四(長寛二)年から一二〇〇(正治二)年に及ぶ。院政から武家政治へと政治体制が変動した時期。源平の争乱についても多数の記述がある。平安時代末期から鎌倉時代初期の研究を行う上での基礎史料と位置付けられている。『玉葉』は『玉海』『月輪兼実公記』と異称を持つ。『玉海』については、同じ五撰家の二条家が『玉葉』という名称を用いず『玉海』と呼んだのが始まりとされる。江戸時代、水戸

藩が大日本史を編纂する時は『玉海』の名で記載された。

(註三)『吉記』は、平安時代末期の公家吉田経房の日記。一一四二(永治二)年から一二〇〇(正治二)年の記録。経房は勧修寺流藤原氏(俗称、日記の家)。権右中弁藤原光房の子で、京都の東郊・吉田に別邸を建てたため、「吉田権中納言」と呼ばれ、吉田家の祖となった。『吉記』は、吉田の姓から後の人が経房の日記を呼んだ称。別に経房の官であった民部卿の唐名・戸部から『吉戸記(きっこき)』と呼ばれることもある。

(註四)『吾妻鏡』または『東鑑』と称する。鎌倉時代に成立した日本の歴史書。一一八〇(治承四)年から一二六六(文永三)年までの八七年間の幕府の事績を編年体で記す。成立時期は鎌倉時代末期の一三〇〇年頃。編纂者は幕府中枢の複数の者。編纂された目録から全五二卷(ただし第四五卷欠)。

(註五)『山槐記』内大臣中山忠親の日記。花山院流藤原氏の公家。洛東の中山に堂を建て、晩年をその傍らの別宅にて過ごしたことから、「中山」を家号として、後世、中山内大臣と称された。「中山」の家名と、内大臣の称「槐門」より、一般に『山槐記』との呼称が用いられるが、他に『貴嶺記』『達幸記』『深山記』などの異称がある。(註六)『明月記』は、鎌倉時代の公家藤原定家の日記。定家が一一八〇(治承四)年から一二三五(嘉禎元)年までの五六六年間にわたり克明に記録した日記。別名『照光記』『定家卿記』を持つ。『明月記』の名は後世の名称で定家が命名したのではなく、当人自身は『愚記』と読んでいた。没後、定家の末裔内では『中納言入道殿日記』

の称を用いたが、一般的には『定家卿記』と称されていた。

(註七) 『平家物語』屋代本 語り本系最古級の写本で、灌頂巻をもたない。章立てを細かくすることで各人物・場面を浮き立たせる覚一本に比べて、各章段のまとまりが大きい。叙事的・編年的要素が強いのが特徴。以前は八坂流平曲の台本と考えられていたが、近年、平家を語る際の方法の違いに応じて使い分けられたテキストと捉えられている。

(註八) 『平家物語』百二十句本 屋代本と同系統の諸本。一二巻の各巻を十句(十章)に分けるため名称。平家全曲の通し語りの作法として、「三十日に百二十句語りつとむ」(『西海余滴集』)という方式が存在した。覚一本や流布本では約二百句に分割されている章段が、本テキストにおいて、一律に百二十句に分けられていることから平曲の語り方を反映している。

(註九) 『平家物語』『延慶本』読み本系には、延慶本、長門本、源平盛衰記などの諸本がある。従来は、琵琶法師によって広められた語り本系を読み物として見せるために加筆されていたと解釈されてきたが、近年は読み本系(ことに延慶本)の方が語り本系よりも古態を存するという見解の方が有力となってきた。

(註一〇) 『続日本紀』平安時代初期に編纂された勅撰史書で、『日本書紀』に続く六国史の第二に当たる。菅野真道らが七九七(延暦一六)年に完成させた。文武天皇六九七(元)年から桓武天皇の七九一(延暦一〇)年まで九五年間の歴史を扱い、全四〇巻から成る。奈良時代の基本史料で編年体、漢文表記である。

(註一一) 『延喜式』平安時代中期に編纂された格式(律令の施行細則)で、三代格式の一つである。三代格式のうちほぼ完全な形で残っているのは延喜式だけであり、細かな事柄まで規定されていることから、古代史の研究では重要な文献となっている。

(註一二) 『源平盛衰記』軍記物語四八巻。人物考証により鎌倉中期の成立といわれたが、武士の服装描写に伺える時代性は鎌倉末期または南北朝期の成立。編者未詳。諸本に、静嘉堂文庫蔵本、蓬左文庫蔵本の古写本系と、近衛本、古活字本など流布本系の二系統がある。両系統の間に大差はなく、流布の可能性は少ない。江戸期になって兵法の書、雑史としての関心などから取り上げられ刊行されている。

(註一三) 『百錬抄』公家の日記などの諸記録を抜粋・編集した歴史書。鎌倉時代後期(一二世紀末)。編著者は未詳。百錬抄とも書く。書名は白楽天の「百錬鏡」に由来するとされ、元は「練」の字が用いられていたが、江戸時代以後に「錬」の字が用いられるようになった。一七巻本中、巻一から巻三欠本。一九六八(安和元)年より一二五九(正元元)年一二月までを天皇紀の形式をとった漢文の編年体によって記されている。

【参考書籍】

- ・『吾妻鏡』一一八五(元暦二)年二月一六日条
- ・『延喜式』平安時代中期
- ・『古記』一一八三(寿永二)年七月二二日条、七月二五日条

- ・『玉葉』九条兼実 一一七六(安元二)年二月五日条、一一七九(治承三)年一〇月二日条、一九日条、一一八〇(治承四)年二月二日、一五日条、一一八一(治承五)年二月二日、一六日条、七月二十五日条

- ・『山槐記』内大臣中山忠親 一一七九(治承三)年二月二八日条
- ・『続日本紀』平安時代初期 菅野真道らが七九七(延暦一六)年に完成

- ・『平家物語』百二十句本 京都府立総合資料館蔵・国会国会図書館蔵
- ・『平家物語』下 日本古典文学大系三三三 高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦校注 岩波書店 一九六八年

- ・『平家物語』「屋代本」
- ・『平家物語』「延慶本」

- ・『保元物語』上 日本古典文学大系三一
- ・『明月記』藤原定家 一二三〇(寛喜二)年五月二三日条

【参考図書】

- ・『平家物語』全一二巻 全訳注 杉本圭三郎 講談社文庫 一九七九年 一―一九九一年

- ・『平家物語』石母田正著 岩波新書 一九五七年(初版) 一九九〇年
- ・『平家物語を知る辞典』日下力 鈴木彰 出口久徳共著 東京堂出版 二〇〇六年

- ・『平家物語転読―何を語り継ごうとしたのか』古典ルネッサンス 日下力著 笠間書院 二〇〇六年

- ・『謡曲平家物語紀行・下』「船弁慶―新中納言知盛」歴史と文学の旅 白州正子著 平凡社 一九七三年

- ・『義経千本桜』(岩波文庫 黄二四一―三) 竹田 出雲等守随 憲治校訂 一九三九年

- ・『世界の名作を読む』池内紀他著 放送大学教育振興会 二〇〇七年
- ・『愛の深層心理』門脇佳吉著 川島書店 一九七一年(初版)

- ・『死と愛』堀英彦著 英知出版 一九八〇年
- ・『平家物語を知る辞典』日下力 鈴木彰 出口久徳共著 東京堂出版 二〇〇六年

- ・『平家物語の死生観』上・下巻 佐伯雅子著 新典社新書一六 二〇〇八年

- ・『死ぬ瞬間』E.キューブラー・ロス著 読売新聞社 一九八三年
- ・『新死ぬ瞬間』E.キューブラー・ロス著 読売新聞社 一九八五年

- ・『源平争乱と平家物語』上横手雅敬著 二〇〇一年
- ・『地獄の思想』中公新書一三四 梅原猛著 一九六七年